

## 教材を見る「目」

2021.08 後藤 忠

### 1 道徳科ではなぜ教材を使うのか

道徳が「道徳の時間」だった頃から、いやもっと昔の「修身」だった時代から、道徳の授業は読み物などの資料を使って行っていました。現在は「特別の教科 道徳」になったので「教材」という言い方をしますが、その役割は昔も今も変わりません。

では、なぜ道徳の学習に読み物などの教材を使うのでしょうか？

道徳科は人間のよりよい生き方やあり方、あるいは人間としての行為、行動について考え、学ぶ教科ですから、学校生活などで起きている道徳上の実際の問題を取り上げ、それを題材にして学習する方がずっと身近で効果的だと思いますか？

それなのに、なぜ教材を使うのでしょうか…、

理由はいくつかありますが、その一つに、実生活での実際の出来事を教材にすると、その場の人間関係や利害関係、力関係、損得・打算、あるいは自己防衛の意識などが働いてしまい、内面的な資質である道徳性を養う道徳科本来の機能が働きにくくなることがあります。

ですから、そうした心配がない「教材」を使い、その登場人物に自己を投影して、教材の中の世界で、屈託なく善悪や葛藤などと向き合い、考えることができる学習を行う、そのために教材を使うのです。

### 2 教材は道徳科の命！

教材は子供の内面を映す鏡であり、生き方の糧となるものです。それほど教材は道徳科の授業にとって重要な「命」です。

「よい教材を選んだ」だけで授業の50%は成功していると私は思います。

### 3 よい教材は教師の心で選ぶ

道徳科の授業は子供の欠点や短所を直すために行うものではありません。人間としての誇りを育て、生きる勇気や希望をはぐくむために行うものです。

そのために用いるよい教材には、子供の価値理解を深め、人間理解を深め、他者理解を深めるエキスがたくさん詰まっています。

**価値理解**…道徳的諸価値は、人間として生きる上でとても大切なことであることを理解する。

**人間理解**…道徳的諸価値は大切だと分かっていても、なかなかそれを実現できない弱さが人間(自分)にはあることを理解する。

**他者理解**…道徳的諸価値を実現したり、実現できなかったりした時の感じ方や受け止め方は皆同じではなく、人によってそれぞれ違うことを理解する。

したがって、単に価値理解だけしか詰まっていない教材は、何とも胡散臭く、授業者の下心が鼻につきます。だからと言って、人間理解だけの教材や、他者理解だけの教材では道徳の授業になりません。

その塩梅が実に絶妙なのが「よい教材」に共通している特徴です。

よい教材は教師の心で、つまり教師の人間性で選びましょう。

その教材が教師の心の琴線に触れ、自然に胸が熱くなる、そういう教材は間違いなくよい教材と言えます。